

第四節 當時の淨瑠璃の内容と結構

寛永以前に於ても淨瑠璃の正本は或は出版されたかも知れないが、之を證すべき資料はない。現存の正本中最も古いものは嵯峨本の『十二段草子』（但しこれは讀本と見るが適當かも知れぬ）を除いては、寛永二年正月開版の『たかだち』である。その後、年と共に正本の刊行は盛んとなり、寛永年間刊行のものでも次の十種の淨瑠璃本が現存してゐる。

たかだち	二年正月
かるかや（説經）	八年
文覺	九年二月
はなや薩摩太夫正本	十一年四月
七人比丘尼	十二年
あくちの判官	十四年六月
むらまつ	十四年



首 卷 「ち だ か た」

- | | | |
|---------|------------|-------|
| 和判判官朝長 | 左内 正本 | 十四年 |
| 八 島 | 六字南無右衛門 正本 | 十六年正月 |
| 小 太 夫 | | 十八年 |
| 小 袖 曾 我 | 薩摩太夫 正本 | 十九年 |
| いけどり夜討 | 若狭守藤原吉次 正本 | 二十年正月 |
| 待賢門平治合戦 | | 二十年四月 |
| 一の谷逆落 | 宮内 正本 | 二十年九月 |
- 寛永に於て既にかくの如く正本版行の機運は年と共に盛んになつたが、それより正保・慶安に及んでは頓に盛況を呈するやうになつた。その刊本の様式は大抵小形の繪入細字本であつて、後世のもの如く節ハカセはなく、全文殆んど假名書で、その中に挿入されてゐる數面の挿畫と相俟つて、女子供にも相當に解り得る程度の通俗的のもので

ある。彼の光悦本を始めとして、元和卯月本、寛永卯月本といふ様な堂々たる善美を盡した謠曲本を出版した謠や能が、その正本について見てさへも如何にも貴族的であるのに對して、かういふ素朴にして通俗的な淨瑠璃本を刊行した人形劇が、如何に一般向、大衆的のものであつたかはこの出版された正本の様式の上にもよく表れて居るといへる。

さてこの時代の正本中現存のものにも、所屬流派の不明なものが多少あるが、大部分は既に前に挙げた物のやうに所屬は明かである。而して今これ等の正本を取つて、これをその内容上から分類すれば、おほよそ次の四種に大別し得ると思ふ。即ち、第一は題材を源平時代前後の武人の活動に關係ある事柄に取つたもの、即ち史劇に屬するもの、第二は神佛の靈驗奇瑞を主題としたいはゆる靈驗物、即ち一種の宗教劇、第三はお家騒動を主材としたもの、第四は世話巷説殊に人買事件を取扱つたものである。尤も實際の脚色上に於ては、以上四種の系統を有する作意は、一篇の作中に二種乃至三種が同時に織込まれて居る場合が多いのであるが、今各作

寺町抄油さきお膳普東園板
寛永二年
正月吉日

尾 卷「ちだかた」

品の主想に基づいて分けて見たのである。

一 史 劇

第一に武人の活動を主題としたものでは、義經に關係の深い所謂判官物が先づ目につく。その主なる物を拾つて見ても、『高館』『八島』『一の谷逆落』『吹上秀衡入』(慶安四年宮内)などがある。

併しながら是等は新作といふよりは、寧ろ舞の詞やお伽草紙の改作に過ぎないものが多い。殊に『高館』『八島』などは、幸若の詞章と殆んど同文である。『吹上秀衡入』は、言はば『十二段草子』の續篇とも見るべき趣向で、『十二段草子』中にも『吹上』の一段はあるが、これを元として、牛若丸がこの地で病になり、悪人の手にかかつて、金品を奪はれて吹上濱に捨てられたのを、天狗や大蛇の奇瑞によつて命を助かり、殊に重態と傳へ聞いて、侍女と共に尋ね來た淨瑠璃姫の看護によつて本復して、奥州秀衡の許へ入國するといふ筋である。また同じく幸若の詞章によつたものとしては『小袖曾我』があるが、これも格別の新味はない。而して曾我物は謠曲にも幸若にも澤山あるが、人形劇に於ては此の時代には餘り取扱はれずして、元祿時代に至つて近松や、初代市川團十郎などの力によつて大發展をする。かく判官物や曾我物に新作



石橋山七騎落「落」挿畫

の却つて乏しかつたのは、既に古典に相當に纏つた作品が多くて、凡庸作家では同じ材題を用ゐてはこれを凌駕し得なかつたので、自然詞章の流用に止つたものと思ふ。

以上判官物・曾我物の外に『文覺』(寛永

『和田判官朝長』(寛永十四左内)、『待賢門平氏合戰』

(寛永二十)、『小敦盛』(正保三、若狭)、『頼政』(正保三、若狭)

『石橋山七騎落』(正保四)、『蒲の御曹司』(慶安三、宮内)

など皆史劇に屬すべきもので、大抵源平時代を世界として居る。

一例として、ここに『石橋山七騎落』の結構梗概をいへば、頼朝が伊豆に配流中に伊東祐親の女と通じて生んだ千鶴丸を、祐親のために慘殺されて深く怨み、必ず報復

しようとしたが、志を得た頃には既に祐親は世を去つた後であつたので、二人の孫一萬・箱玉を梶原に命じて由井濱で殺させようとするのを、畠山重忠が強訴してその命を助けてやるといふ筋で、『切兼曾我』の作りかへで、これに頼朝が兵を擧げて石橋山に敗れ、七騎落をする事柄を取合せて題名としたのである。斯の如く、源平時代の事柄を材として種々に仕組んだものである。

ところが之に對して異彩を放つて居るのは『諏訪本地兼家』である。本曲は若狭守の正本で、正保三年正月の刊行であるが、その梗概は次の如くである。敏達天皇の御宇に近江國の甲賀三郎といふ武勇に秀でた武士が、腹心の郎黨竹綱を従へて、若狭の大掛山に妖怪退治に赴き、或は美女となり或は美少年と化けて現れる變化を、傳家の角の槻弓神通の矢を以て退治したが、同行の若狭の人權の左衛門の爲に岩窟中に置きざりにされる。兼家はそれから岩窟の大穴を七日七夜落ちつづけて地獄に出で、一百三十六地獄を廻つて、遂に觀世音の利益と名鏡の威徳とによつて身命を全うして再び故郷に歸る。この間に竹綱は左衛門を討つて主の怒を晴らして居たので、兼家は家の子の一丸に譲り、諏訪の神殿に飛び入つて諏訪明神と祀られるといふのである。故に本曲は有名な甲賀傳説を主材としてゐることは言ふまでもなくして、後の『甲賀三

『郎』の戯曲の原據をなすものといふべきである。その略系を示せば次のやうになる。

○甲賀三郎兼家

甲賀三郎

甲賀三郎

甲賀三郎箱物語

(井上播磨)

(寶永元、義太夫)

(享保廿、出雲・文耕堂)

一心五戒玉

(元禄十二年七月、歌舞伎一うはなり)の原作

併しこの作を分析して見ると、甲賀家の寶物に角の槻弓神通の鎬矢のありといふのは、『田村のさうし』(正保四年三月刊)と共通の材料であり、地獄巡りの條は『富士の人穴草紙』を聯想させ、また一方に於ては、同一の系統の傳説だけに、百合若冒險譚に似た點もあると共に、大江山の鬼神退治の説話も加味されて居るやうにも思はれる。而して題名の因つて來る大團圓には本地物のほひもあるが、主想は武勇譚冒險記であつて、戰記物の系統に屬するものに題材を取つた前述の史劇とは、全く異つた妖怪味や靈驗色の多い、架空的の武勇談であつて、やがて榮えるべき金平物の先驅をなすと共に、奔放なる荒唐無稽の脚色に、見物の目を喜ばせる操芝居の特色を發揮して居ると考へ得られる。

二 靈 驗 物

第二に靈驗物、即ち宗教劇としては、上述の『諏訪本地兼家』なども見方によつてはさうも取れるが、その他に『阿彌陀胸割』の系統を引いた『阿彌陀の本地』(正保元)『清水乃御本地』(慶長)などがあつて、これは最もその特色を具へて居る。また次に述べるお家騷動物や人買物の中にも、神佛の靈驗の織込まれて居ないものは殆んどないといつてよい位で、古淨瑠璃は結局、濃淡の差こそあれ、一つとして神佛の靈驗的色彩を帶びないものはない。これがやがて古淨瑠璃の一特徴といつてよい程である。蓋しこの特徴は、中世期よりの傳統的の當代民衆の信仰的生活を背景として作られたから、といふ理由もあらうし、また材題上、直接説經の影響なども考へられるが、また一方に於ては、人形劇は能や幸若や又は歌舞伎劇などよりも、靈驗奇瑞といふやうな超人間的の材料を取扱つて、演出上の効果を收め得るに適して居るといふ獨特の長所を有つてゐたから、一般觀衆の目を喜ばせるために盛んに用ゐられたものであらうといふ事も考へられる。次に『阿彌陀の本地』は、印度の轉輪王の太子善成太子(ぜんじょう)が、その愛する妃阿閼(あつ)姫の横死を悲んで出家し、法藏比丘と稱へて一切衆生濟度のために四十八の誓願を立てて、これが爲に精進を續けて遂に成道して阿彌陀如來となると共に、その願力で妃は東方淨瑠璃國土に往生して、その教主藥師如來となるといふ筋で、説經の『法藏比丘』と同一物である。こ

の改作に『四十八願記』と題する山本土佐掾の正本がある。文章は頗る流麗で、古淨瑠璃中の佳作の一つである。

三 お家騷動物

次にお家騷動物としては『はなや』(寛永十一さつま)『安口判官』(寛永十六杉山)『小太夫』『明石』などがその代表作である。お家騷動物は大抵同工異曲で、悪人の奸計の爲に一家離散の厄に逢ひ、主君は殺され、遺族は悪人の追跡を避けつつ流浪の辛酸を嘗める。その間に忠臣の犠牲的活動により、また神佛の冥助も加はる場合もあつて、悪人は滅びて目出度くその家が復興するといふ形式のものが多し。尤もこのお家騷動物は、その原因について見れば、それが外から来るものと内から起るものとの二種があつて、後者が眞のお家騷動物といふべきであるが、この時代にはその形式は却つて少く、上に列記した作品中では『安口』だけがそれで、他の三篇は皆前者の形式である。以下これら諸作について少しく解説批判を加へよう。

先づ『はなや』から述べる。この作の荒筋はかうである。

聖武天皇の御宇に博多に花屋長者家房といふ武士があつた。時の九州管領萩原國司が、その妻として花屋の

女花世姫を切望したが、拒絶されたのを恨んで長者を朝廷に讒奏したので、長者は相模に流される。跡に残つた花世姫と花若とは、父の冤罪を雪がうとて上京の途上、國司のために迫害を蒙つたが、觀世音の利生によつて難を遁れて辛慘を嘗めつつ都に辿りつき、のち法華經の功力によつて、花若が時の皇后の御惱を平癒し奉つた恩賞として父は赦免され、共に歸國して萩原を討つといふのである。

この作では花屋一家の騒動の原因は、戀の叶はないのを怨んで惡國司の復讐的所業であつて、後世のお家騒動のやうに繼子いぢめや、惡臣の奸計などによるのとは趣を異にし、舞曲の『志



「は な や」挿畫

田』などに見る仕組で、これが當時行はれた一形式であるが、戰爭物とお家騒動物との中間に位するやうな作柄である。また作中で花世姫が萩原に挑まれる時、一夜に面貌が變つて醜婦となつて路傍に捨てられるとか、或は花屋長者が由比濱で首を討たれようとする刹那に花若が、赦免狀を持つて驅着けるといふ場面などは、後までも踏襲

される趣向であつて、當時も頗る興味を以て迎へられたものと考へるが、さういふ特殊の場面を除いては大體に於て古風な作柄で、お伽草紙風の點を多く認める。

次に同じやうなお家騒動物としては『明石』をあげる事が出来る。併し後に作られただけであつて、その脚色結構は頗る複雑である。



明石「挿畫」

中昔の事であるか、播磨外四ヶ國の主明石左衛門繁次の子に三郎繁時といつて、熊野權現の申し子で八十餘人力の勇士があつた。御臺所は津國多田刑部の女であつた。一年、御臺は熊野權現へ參籠したが、その時七條關白の息高松中將に懸想され、中將はこれが爲に病氣となつた。

父關白は、明石三郎を亡き者にして御臺を中將に娶せようと企て、利を喰はせて多田刑部に明石を殺させようとしたが、明石は熊野權現の冥助によつて助かる。で、刑部は更に關白と計り、殿下の命による掣搦の口實で、明石を都に召寄せ、兵力に訴へて捕縛し、奥州津輕に流して土牢に幽閉した。明石の妻は、夫の行方を尋ねて流浪し、つぶさに辛酸を嘗める。明石は神助によつて牢を破り、信夫の庄司に身を寄

せてゐると、ここで圖らず夫婦はめぐり合ふ。明石は庄司の助を得て兵を率ゐて上京し、悪人を懲伐するといふに終る。

この作中で、多田刑部がその子太郎・次郎の諫を用ゐずに、三郎・四郎と共に聳の明石を毒殺しようとする條は、説經の小栗判官毒酒の段に似て居り、また明石が都に熊王といふ馴染の遊女のあること、怪力を以て牢を破ることなどは幸若舞曲の『景清』を聯想させる趣向である。以上の二曲に對して『小太夫』は、頗る作意が違つてゐる。

上州多々良の城主甘樂太夫朝正が、下野國足利の住人荒間兵衛景信に襲はれて捕虜となり、その國は横領されてしまふ。忠臣安綱が御臺・若君を連れて、碓氷山中に隠れて薪水の勞を取る傍ら、非人にやつして敵地に入り、主君の居所を見届けた上、妻の小太夫を奉公人に仕立てて、主君を監禁してゐる源藏といふ者の邸に住込ませ、隙を窺つて主君を牢から救ひ出し、のち主従力を合せて景信を滅し、甘樂の家を再興するといふ筋である。

前の『はなや』に於ては、觀音の冥助と法華經の功力とが家を再興する有力な原因であり、また『明石』に於ては、牢を遁れるは神助によるに對して、これは安綱・小太夫夫婦の忠烈な働きによるといふ點が非常に相違して居り、前二者の頗る宗教的であるに對して、これは道義

的であつて、寧ろ史劇に近い作柄で、後のお家騒動物の一原型と見られる程であるが、此時代のものとしては一異彩といつてよ。

さて以上の『はなや』『明石』『小太夫』は、脚色の上は相違あるものの、いづれもその家の騒動の原因は外からである點に於ては共通である。然るに『安口』はさうではない。この作では、

筑紫の大名安口判官繁行が、悪家老兵部太夫に調伏されるのが騒動の原因となつて、ここに一家は離散し、



あ く ち 「挿 畫」

長男の太郎は悪人に殺されるが、御臺と二男の二郎は落延びて、肥後の高瀬の浦から乗船したところ、人買と同船して既にその手で賣られる事となる。然るに素性を語り合つて見れば、その人買源太夫は安口の舊臣柏原竹丸の成れの果であつた。で、竹王は舊恩に報いるべく、御臺と若君を伴うて奈良に到り、兵部の悪事を朝廷に訴へて二千の兵を賜り、歸國して兵部を討ち、二郎は本領に安堵するといふ筋である。

御臺と若君とが人買舟に乗る條は説經の『山姥太夫』の翻案のやうに思はれるが、その人買が圖らずも舊臣であるといふ趣向は目先が變つてゐて、後の初代義太夫の正本『三井寺狂女』の第三段目の仕組などの原據をなし、更に轉じては『雙生隅田川』の人買惣太の手にかかる梅若丸の筋ともなつたもののやうにも見られる。また竹王が舟の上で名所を物語る條は、淨瑠璃によくある所謂名所づくしの節事的一種であるが、當代の作としては相當觀客に喜ばれた場面であつたらうと思ふ。

さてお家騷動の例として舉げた以上の諸篇は、いづれも世界は平安時代（『小太夫』は不明）頃のものであるが、その中に仕組まれてゐる事件そのものは、下剋上の行はれた室町時代または江戸時代に於て封建制度が確立して家名を重んじ、また家名に伴ふ特權の世襲された時代に屢起つた現象を取扱つたものである。而して足利時代の文藝でお家騷動を取扱つたものとして見るべきは、謠曲の『鳥追舟』幸若の『信田』などで割合に少いやうだが、江戸時代になつて淨瑠璃が榮えると共に大に行はれ出したのである。そして既に前に舉げたやうな相當に複雑な脚色の作が、この時代には作られてゐる。そしてこのお家騷動は、この後いよいよ流行する事となり、人形劇のみならず、歌舞伎劇に於ても、元祿時代には上方に於ては全盛を極めると

いふ狀況で、我が國近世戯曲中に於ては最も大切な題材となるのである。この意味に於て、當代のお家騒動物には史的價值を認むべきである。

四 人 買 物

第四に人買物、即ち誘拐事件を詩材として作つた作について見るに、この事柄は室町時代に於てしばしば行はれたものであつて、既に謠曲（隅田川・櫻川・三井寺・百萬・自然居士）に、幸若（信田）に、將又説經（山辨太夫）にも作られてゐるが、淨瑠璃も亦この好箇の材題を見遁さなかつた。のみならずその詩材の範圍を更に擴大するに至つた。既に前に述べた『安口』にも人買の事は仕組まれては居るが、筋の主要部とはなつてゐない。人買事件を主材としたものとしては、當代の淨瑠璃では『村松』をその代表作として擧ぐべきである。本曲は結構も頗る整つて居て、この期間の淨瑠璃の形式を知る上にも大いに參考となると思ふ。その梗概は次のやうである。

一段目 嵯峨天皇の御宇、攝津・播磨・近江の領主五條壬生大納言の子中納言は、相模の國司となつて赴任し、在任中に同國の住人村松殿の女と契つて一若を生む。中納言は妻子の愛に引かれて任期が果ても歸

洛しない。勅命背違の廉で隠岐へ流される。

二段目 中納言が残した夫人を曾我四郎助文が妻に望んだが、村松は拒絶したので、曾我は怒つて村松の居城を攻めて之を滅す。この時村松の弟山田七郎は奮戦して壯烈な最後を遂げる。この條は後の金平を聯想させる。

三段目 中納言の妻と一若とは、九死に一生を得て流浪の身となつたが、大津の人買惣太に捕へられ、それから多くの人買の手を経て、遂に陸奥の武白殿たけすに賣渡される。

四段目 薄命な母子は武白家の侍女小笹の告白によつて武白の妻の嫉妬を買ひ、農奴として酷使される。一方、隠岐に配流中の中納言は皇后御産祈りの爲に特赦となつて歸洛する。

五段目 中納言は妻子の搜索に出かけ、北國路を辿りつつ遂に奥州に下る。そして田の草を取つて居る妻と草を刈つてゐる我が子とに再會したが、三歳で別れた一若はこの時九歳になつてゐた。

六段目 中納言は武白殿に會つて、夫人を譏言した小笹の舌を抜いてなぶり殺しにして、歸洛の途上大津の長太を斬つて獄門にかけ、勅許を得て武藏の國司となつて曾我四郎を討ち、反忠の惡人忠太を生埋めにして鋸引にする。

先づ形式上から見れば、第一段は事件の起る原因を示す發端であり、第二段は事件爆發の悲壯な有様を示す修羅場で、第三段に至つて場面が變つて、次の四段目の前半までに互つて悲慘

なる母子の境遇をゑがくもので、事件葛藤の頂點を示す。そして四段目の後半に於て再び場面は轉じ、中納言の道行から、五段目の再會の喜びと筋は展開するのであつて、即ち四段目から五段目が一篇の山である。そして六段目は惡人が懲罰を受けて目出たく納るといふ仕組である。人物の性格などは描き出されては居ないが、事件の展開・葛藤・解決は相當に順序よく運ばれて居ると思ふ。

次に本曲を内容上の題材の方面から見れば、幸若舞曲の『信田』と説經の『山柵太夫』とを取合せて脚色したやうに思はれる。即ち中納言の妻子が天津の人買長太の毒手に落ち、それから敦賀の源三に絹十四疋で賣られ、更に三國へ十五疋で轉賣され、更に賣られ賣られて越後の直井の次郎に絹五十疋で買はれ、更に直井から奥州の武白へ上々の絹二百疋で賣られるのは『信田』で、信田小太郎が天津の人買藤太に誘拐されて、京―鳥羽・堺―四國―西國―北陸と轉賣されて、終に奥州率土^{そと}が濱の鹽商人に買取られる筋を本としたものであるが、また一方に於て中納言の妻子が夫の跡を追つて流浪中人買の手にかかり、果は草刈牛追とまでなることや、中納言が後に國司となつて妻子に辛かつた者に復讐し、殊に鋸引の極刑にまでもするといふ趣向は『山柵太夫』に似て居る。尙又、曾我四郎が村松の女を妻に望んで拒絶されたのを怨んで、

兵力に訴へる二段目の趣向は、『はなや』の類型とも見るべきである。全體から見て、戯曲としては尙まだ未完成の批難を免れないと思ふが、當代の淨瑠璃戯曲としては集成された觀のある作柄で、殊に人買物としては代表的の作品であるといつてもよい。

結 語

要するに當代の戯曲は、創始時代の傾向を承けて更に一段の開発を見ると共に、また詩材を廣く幸若・説經・お伽草紙などの諸方面に求めて、相當に澤山の新作を出してゐる。併し作者としての勝れた技倆を持つた者がまだ出る機運にまで達してゐなかつたので、戯曲として獨立の價値を有する程の傑作はなく、ややもすれば數種の類型の範圍を出ることが出来なかつたとは雖も、創始時代に比して發達の跡著しく、次いで來るべき古淨瑠璃の全盛時代への準備過渡の時代として、注目すべき期間であつたと言ひ得る。

この期間の淨瑠璃は文體としては、古雅素朴なるお伽草紙や勁健な幸若の文脈も受けて居るが、より多く説經の影響を受け、愁歎場などは説經口調そのまゝなのが多い。大體に於て文飾を避けて故事古典を多く用ゐずに、平易素朴な文體を以て事件の展開を敘述するといふ純然た

る敘述的形式を取つて居るものが多い。作品一篇の結構は、『高館』の五段を除いては、他はすべて六段組織であつて、第一段に於て全篇の事件の發端を示し、伏線を設け、第二段は此の跡を承けて事件の破綻を描き、全篇の大葛藤への第一步を示す。それから第三段より第五段に互つて葛藤の高潮、事件の紛糾となり、ここでは多くはその作の主要人物、又は少年少女等が運命に弄ばれ、悪人の毒手にかかつて悲惨な境遇に身を置くといふやうな仕組のものが多く、大抵は全篇の山がこの間に設けられてある。そして第六段に於てすべては解決される。而してこの解決は悲劇に終るものではなくて、神佛の靈驗や忠臣義士の献身的の働きなどによつて、悪人が滅びて善人が榮えるといふ目出度い大團圓で、ここに因果應報の理を寫して居るのが常である。嚴格にいへば敘事的文學たる物語の範圍を脱し切らずして、劇としては形式も内容もまだ整はないものであり、人物を扱つても性格を描くのではなくて、境遇の爲に左右されるもののみで、外的事件の推移のみに力を注いで居り、超人間的であり不自然であるを意に介せざるのみならず、寧ろこれを利用し濫用して居る。かくの如くして古淨瑠璃の大切な原型は、既にこの期に於て出來上つて居るといつてよいと思ふ。